

日韓中の若者における 親子関係・友人関係の性差

山 口 洋

1. 本稿の目的と意義

現代の日本では、性別役割分業に対して否定的な意見を持つ人が増えてきた（尾嶋1998）。我々の調査結果でも「夫唱婦随」「男は仕事，女は家庭」といった家族像を理想とする若者は男女ともかなり少数派である（調査票問1）。しかし，このような価値観念のレベルではなく，半ば無意識的に形成される人間関係のパターンは別の様相を示す可能性もある。例えば，意識の上では性役割観念に否定的でも，親子関係・友人関係のあり方が「男性的」「女性的」だったり，相手の性別によって接し方が違ったりすることはあろう。一般に，性別役割分業の強固な社会では，人間関係の様々な側面に性差が生じる。例えば同性同士と異性同士では関係の在り方が異なり，男同士の関係と女同士の関係も互いに異質なものになるだろう。

本稿では，若者たちにとって「一緒にいるとほっとする人」「ほめられるとうれしくなる人」「心を打ち明けて話せる人」「そのような人になりたいと思う人」はそれぞれ誰かを問う質問項目を用いて，親子関係・友人関係の性差に関する日韓中三カ国比較を行う。それを通じて，日本における性別役割分業の程度および特質の一端を明らかにすることが本稿の究極的な目的となる。

この問題に関する比較の対象として，韓国と中国を設定することの意義を確認しておこう。日韓中三カ国は地理的に近接し，伝統文化の中に共通の要素を持つがゆえに何かと比較されやすい。しかし，性別役割分業の構造に関しては，やや対照的な言われ方をされてきている。韓国は日本と並んで，産業化の進んだ国々の中では伝統的な性役割規範が強い方だとされてきた。例えば，「M字曲線」といわれる年齢別女子労働力率のグラフでいえば，韓国では日本と同様，平均初婚年齢にあたる20代後半から30代前半にかけての「M字の窪み」が西洋の先進諸国に比べて非常に大きい（落合

1997, 15頁)。さらに韓国では男子にのみ徴兵制があり、大学生の年代で否応無く男女は別々の役割を与えられる。対照的に中国は、中華人民共和国建国当初(1950年代)から、女性の就労を奨励するスローガンを掲げてきた。実際、中国人夫婦の多くは共働きであり、夫も韓国や日本に比べると育児・家事にかなり協力的だといわれる。そのため、中国の年齢別女子労働力率のグラフは、結婚・出産退職を意味する「M字の窪み」がほとんどみられない(瀬地山 1996, 316頁)。また、女性の就く職種も多様であり、中国の都市では、バスやタクシーの運転手のように、日本や韓国では一般に「男性の仕事」とみなされる仕事をしている女性の姿も珍しくない。このように、性別役割構造においてかなり対照的な捉え方をされてきた韓国・中国は、日本の現状を位置付ける上で、格好の座標軸を提供してくれるはずである。

2. 分析枠組

2-1. 性別役割分業と親子関係・友人関係

パーソンズが『家族』で描いたように、性別役割分業を前提とした核家族では、父親が道具的リーダーとして主に外的機能を担い、母親が表出的リーダーとして内的機能を担う(Parsons & Bales 1956, 訳書77頁)。そして息子は父を娘は母を役割モデル(role model)もしくは準拠的個人(reference individual: Merton 1957)として、性別役割およびそれに関連した様々な社会的役割を身につけて成長していく。ただし、主に母親が育児を担当し、表出的役割を担うため、息子にとっても娘にとっても情緒的な親密さを感じるのは、主に母の方である。

一方、友人関係に関する英米の調査研究を検討したアランの『友情の社会学』によれば、従来、友人関係を定義する際、「道具的というより感情表出的な関係」ということが重要な一要素とされてきた(Allan 1989, 訳書29頁)。そして、性別役割分業の発達した社会では男性=道具的・女性=表出的という役割を担うため、女性の方が特定の友人とのより親密な関係を持つ傾向があるとされる(前掲訳書103頁)。また、性的関係への発展可能性が、友情それ自体の発達を阻害するため、異性間の友人関係は同性間のそれよりも発達しにくい、ジェンダー間隔離が減って交流機会が増えると、異性間の友情が増える可能性があるという(前掲訳書128頁)。

以上のパーソンズとアランの所説を参考にすれば、性別役割分業の強固な社会では、以下のような仮説がすべて妥当する筈である。

仮説①子供にとって母の方が父よりも親密な存在になりやすい。

仮説②子供と同じ性の親の方が子供にとっての準拠的個人になりやすい。

仮説③女性同士の友人関係の方が男性同士の友人関係よりも親密になりやすい。

仮説④同性同士の友人関係の方が異性同士の友人関係よりも親密になりやすい。

この仮説②では、準拠的個人というタームのかわりに、役割モデルというタームを用いても実質的な意味にそう大差はない。ただし、「役割モデル」がどちらかといえれば部分的な同一化の対象を指すのに対して、「準拠的個人」はより全面的な同一化の対象を指す (Merton 1957, 訳書276頁)。本稿では、後で述べる質問項目との整合性を考えて「準拠的個人」の方をもっぱら用いることにしたい。

友人関係については他に仮説⑤「同性の友人の方が異性の友人よりも準拠的個人になりやすい」というものも考えられるがここでは扱わない。この仮説も我々のデータで操作的に扱いうるが¹⁾、以下のような概念的な不整合から結果の解釈が難しくなる。第一に、友人関係はどちらかといえば表出的関係 (Allan 1989, 訳書29頁) なので、親密性を問う仮説④の方が友人関係の本質にマッチしている。第二に、友人関係は親子関係や先輩後輩関係などとは異なり、一般に平等な関係 (Allan 1989, 訳書30頁) と考えられ、やはり準拠的個人の概念はややなじまない。

本稿の関心は上記の仮説の検証そのものではなく、仮説の妥当性の程度を日本・韓国・中国で比較することにある。例えば、仮説④が日韓中である程度妥当することは自明なことであり、むしろ、その程度に違いがあるかが問題となる。こうした作業を通じて、三カ国の性別役割分業の程度や特質を明らかにするのが究極目的だからである。冒頭で述べたように、日韓中についてこれまで言われてきたことから予想すると、中国で最も当てはまりが悪く、日本が中間、韓国で最も当てはまりが良くなりそうだが、実際に我々のデータでみるとどうだろうか。

2-2. 質問項目と作業仮説

分析に用いる質問項目 (調査票問 6 a~d) とその意味付けは以下に列記した通りである。我々の調査票では、これらの質問項目に対して、〈父・母・兄弟姉妹・祖父・母・同性友人・異性友人・恋人・その他〉からなる選択肢から複数回答を求めている。

1) この仮説⑤は2-2節で述べる質問項目 b と d を用いて、「同性友人」の選択率と「異性友人」の選択率を比較すれば検証できる。ちなみに分析結果は、日本・韓国で比較的当てはまり、中国では当てはまらなかった。

る。ただし北京職業人調査、河南・山東農村調査では、例外的に「上司」を含めた9つの選択肢から回答を求めた。本稿では、これらの選択肢のうち〈父・母・同性友人・異性友人〉という4つが問題となる。

- 質問 a: 「一緒にいるとほっとする人」 : 親密性 1
 質問 b: 「ほめられるとうれしくなる人」 : 準拠的個人 1
 質問 c: 「心を打ち明けて話せる人」 : 親密性 2
 質問 d: 「そのような人になりたいと思う人」 : 準拠的個人 2

前節で述べた4つの仮説から、上記の質問項目にあわせて作業仮説を導けば以下のようなものが列記されよう。不等号は選択率の差異を表す。「息子」とは男性回答者のことであり、「娘」とは女性回答者のことである。なお、仮説①と④の場合、理論的には男性（息子）と女性（娘）に分ける必要がない。しかし、我々の調査では対象地域によって男女比率に若干違いがあり、解釈に混乱をきたすため、ここでは分けて検討することにした。

仮説①子供にとって母の方が父よりも親密な存在になりやすい

質問 ac で, [息子の母選択率] > [息子の父選択率] 以下略記

質問 ac で, [娘～母] > [娘～父]

仮説②子供と同じ性の親の方が子供にとっての準拠的個人になりやすい。

質問 bd で, [息子～父] > [娘～父]

質問 bd で, [娘～母] > [息子～母]

質問 bd で, [息子～父] > [息子～母]

質問 bd で, [娘～母] > [娘～父]

仮説③女性同士の友人関係の方が男性同士の友人関係よりも親密になりやすい。

質問 ac で, [女性～同性友人] > [男性～同性友人]

仮説④同性同士の友人関係の方が異性同士の友人関係よりも親密になりやすい。

質問 ac で, [男性～同性友人] > [男性～異性友人]

質問 ac で, [女性～同性友人] > [女性～異性友人]

3. 分析結果

3-1. 仮説の妥当性比較

表1では、京都から河南・山東まで、7つのデータセット別に分析結果を示している。これら7つのデータセットのうち、大阪は女性サンプルが極端に少ないため、分析結果も参考程度にとどめる。また河南省と山東省の農村青年のデータはサンプル数の都合上、合併して分析する。

表1の分析番号5～8, 13, 14では「父」「母」「同性友人」それぞれの選択率を、男性と女性の間で比較している。検定は、(選択・非選択)×(男性・女性)という2×2のクロス表を作成し、 χ^2 自乗検定(項目間独立性検定:有意水準5%)を行っている。分析番号1～4, 9～12, 15～18では「父」の選択率と「母」の選択率との

表1 親子関係・友人関係における性差(単位%:選択比率の差)

仮説	分析	質問項目(略記)	[選択側~被選択側]	(参考)						
				京都	大阪	テグ	全州	北京学生	北京職業	河南山東
①	1	a ほっとする人	[息子~母]-[息子~父]	14.4	31.4	31.5	13.8	12.4		
	2	c 話せる人	[息子~母]-[息子~父]	11.8	18.4	16.5		28.3	44.8	
	3	a ほっとする人	[娘~母]-[娘~父]	34.3	*****	37.9	35.2	15.9		12.3
	4	c 話せる人	[娘~母]-[娘~父]	35.0	*****	31.5	26.6	26.2	19.1	47.3
②	5	b ほめられたい人	[息子~父]-[娘~父]		*****		12.9			
	6	d なりたい人	[息子~父]-[娘~父]	16.0	*****	17.7	28.6			
	7	b ほめられたい人	[娘~母]-[息子~母]	20.3	*****					14.1
	8	d なりたい人	[娘~母]-[息子~母]	20.8	*****			16.8	10.5	21.6
	9	b ほめられたい人	[息子~父]-[息子~母]			18.2				16.1
	10	d なりたい人	[息子~父]-[息子~母]	16.2	30.7	17.7	20.7	25.5	19.3	27.4
	11	b ほめられたい人	[娘~母]-[娘~父]	10.5	*****					
	12	d なりたい人	[娘~母]-[娘~父]	20.6	*****		15.1			
③	13	a ほっとする人	[女性~同性友人]-[男性~同性友人]		*****					-15.0
	14	c 話せる人	[女性~同性友人]-[男性~同性友人]		*****			13.8		19.7
④	15	a ほっとする人	[男性~同性友人]-[男性~異性友人]	44.4	33.8	44.1	40.7	35.3	30.3	28.1
	16	c 話せる人	[男性~同性友人]-[男性~異性友人]	50.6	45.8	63.5	60.5	29.0	24.2	16.1
	17	a ほっとする人	[女性~同性友人]-[女性~異性友人]	52.6	*****	53.9	49.7	26.6	30.6	39.9
	18	c 話せる人	[女性~同性友人]-[女性~異性友人]	62.4	*****	66.5	62.2	42.9	39.3	37.7

※10%以上の差のみ表示。 ※マイナスの符号は仮説とは逆の比率の差がでたもの。

※*****印は女性のサンプル数が少なく、分析が不可能だったところ

※分析番号5～8, 13, 14で表示した比率の差は、2×2表の χ^2 自乗検定(項目間独立性), 5%水準で全て有意

※分析番号1～4, 9～12, 15～18で表示した比率の差は、マクネマー検定, 5%水準で全て有意

差、「同性友人」の選択率と「異性友人」の選択率との差をとった。検定は、(父・母)×(選択・非選択)、(同性友人・異性友人)×(選択・非選択)という形の2×2表を作成し、マクネマー検定(有意水準5%)を行っている。表1では、上記の検定をパスしたもののうち、±10%以上の差があったものだけを有意な差として表示した。マイナスの符号は、仮説とは逆の差異が見られたことを示している。

まず仮説①「子供にとって母の方が父よりも親密な存在になりやすい」については、三カ国とも当てはまりがよい。日本(京都)、韓国(テグ・全州)では、分析1～4まですべて+10%以上の差が見られる。ただ中国(北京学生、北京職業人、河南・山東農村青年)では、分析によっては+10%以上の差が出なかったものもある。しかし、河南・山東の農村部では、父よりも母の方が圧倒的に「話せる人」だとされており(分析2と4)、その差はむしろ日本、韓国よりも大きい。「子供にとって母の方が父よりも親密な存在になりやすい」というのは、日韓中に概ね共通してみられる傾向だといってよいだろう。

仮説②「子供と同じ性の親の方が子供にとっての準拠的個人になりやすい」については、日本で当てはまりがよく、韓国・中国で悪い。日本(京都)では、分析5と9を除く6個の分析項目において、+10%以上の差異が見られたのに対して、韓国・中国の各データでは、2個から4個の分析項目にとどまっている。日本特有の傾向は、分析11と12にみるように、娘(女性)において、「ほめられたい人」「なりたい人」として父よりも母が顕著に多く選択されていることである。これは、分析12の全州データを除くと他国では全くみられない傾向であった。また、分析7と8にみるように、母を選択する割合が息子よりも娘に多いという傾向も、日本では比較的はっきりしている。対照的なのは韓国で、分析7、8では顕著な差が一切みられなかった。まとめていえば、女性同士の「娘～母」関係が他の関係に比べて優越しているのが、日本の特徴である。

仮説③「女性同士の友人関係の方が男性同士の友人関係よりも親密になりやすい」については、日韓中三カ国とも当てはまりが悪い。ただ、分析14では、北京の学生と河南・山東の農村青年が仮説に沿った傾向を示している。しかし、分析13では同じ中国の北京の職業青年において、仮説とは正反対の差異がみられた。すなわち「ほっとする人」として「同性友人」を挙げる人が女性よりも男性の方に15%も多い。総合して考えると、三カ国ともに当てはまりは良くないといえよう²⁾。

2) 本稿で用いた質問項目は、仮説③の検証には単純すぎたかもしれない。親しい友人と共にした行動を詳しく尋ねるなどすれば、女性同士の友人関係と男性同士のそれとの違いはも

仮説④「同性同士の友人関係の方が異性同士の友人関係よりも親密になりやすい」については、三カ国とも当てはまりがよい。ただ、パーセンテージをみると、分析15～18までのいずれをみても、日本・韓国のデータに比べ中国のデータでは概ね差が小さいことが読み取れる。仮説そのものは三カ国とも妥当しているとみていいが、妥当性の程度は日本・韓国よりも中国で悪いということになる。

以上の分析結果をまとめて判断すると、パーソンズやアランが述べるような、性別役割分業の強固な社会のパターンに最も近いのは、結局、日本だということになる。すなわち、日本では親子関係・友人関係の性差が「男は外、女は内」という性役割構造から予想されるパターンに最もよく当てはまっている。特に仮説②の当てはまりが良かったことが他国にみられない特徴である。表1をみるかぎり、韓国と中国では当てはまりの良さにそれほど差はないが、仮説④でのパーセンテージの差を重視していえば、最も当てはまりの悪いのは中国だということになる。

3-2. 分析結果の解釈

以上の結果をどう解釈するか。最も単純な解釈は、仮説の検証結果には、各国における性別役割分業の「程度の差」がストレートに反映されていると考えることである。すなわち、性役割の構造が日本では強く中国では弱いため、親子関係・友人関係の性差を予測する仮説は日本で比較的よく当てはまり、中国で当てはまりが悪かったということになる。確かに、中国では1950年代以降、女性の就労を奨励する政治的スローガンが掲げられてきた。また、このスローガンの源流は、中華民国時代の新文化運動にまで溯ることができ、既に中国における新たな伝統と呼べるかもしれない。一方、日本でその種の政治目標が掲げられたのは、男女雇用機会均等法ができた1980年代が最初であった。

しかし、こうした単純な解釈に対しては多くの疑問点がある。四点ほど挙げてみたい。第一に、我々の調査結果で見ると、性役割に関する「価値観」のレベルでは、日本の若者が三カ国の中で最も伝統的だとはいえない。問24eの「女性と男性は、各々の特性に応じた教育をすべきである」に対して、日本（京都）の女子は三カ国の男女の中で最も否定的な反応を示している³⁾。日本の男子はそれに比べて肯定的だが、韓国（テグ、全州）の男子に比べれば否定的な反応を示している⁴⁾。問24f

↘ と顕著に現れたのではないか。

3) そう思う～そう思わないを各4～1点とすると、女性データの平均は、京都1.79、大邱2.20、全州2.31、北京学生2.26、北京職業人2.09、河南・山東2.21であった。

の「軍隊は、女性にふさわしくない」に対しては日本の若者が最も肯定的に反応しているが⁵⁾、問24gの「中学校の生徒会長は男子に向いている」に対する日本の若者の反応は、三カ国の中で最も否定的といってよい⁶⁾。また、問1の「理想の家庭像」で「夫唱婦随」または「父は仕事、母は家庭」という選択肢を選ぶ割合は、男子の場合、韓国と並んで中国よりもやや高いが、日本の女子は他国の女子同様5%程度である⁷⁾。

冒頭で述べたように、これらの自覚的な価値観と半ば無自覚的に形成される人間関係のパターンとが関連しないのは当然であり⁸⁾、人間関係のパターンの方が性役割構造の現状をよく反映している、と考えることもできる。しかしそうだとした場合の第二の疑問は残る。すなわち、前節の分析では、どちらかといえば日本の方が韓国よりも仮説の当てはまりが良かったが、冒頭述べたように、女性の就業構造の現状をみると、むしろ日本よりも韓国の性役割構造の方が強固であるようにみえる。我々のデータでみても、若者達の母の専業主婦率は、日本よりも韓国の方が高い⁹⁾。したがって親子関係・友人関係の性差のパターンが、就業構造における性別役割分業の「現状」を単純に反映しているという解釈は、日韓の違いをうまく説明できない。

第三に、全体的にみて仮説の当てはまりが悪い中国でも、部分的には、日本・韓国と同等かそれ以上に、仮説に沿った結果を示している。例えば、中国でも父親は母親に比べ子供にとって親密な存在ではない(表1の仮説①参照)。特に、河南・山東の若者においては、母を「話せる人」とする割合が、父を「話せる人」とする割合よりも圧倒的に高くなっている(表1の分析2, 4を参照)。

第四に、中国では仮説④の傾向が他国よりも弱かったが、その理由は同性同士の友人関係の希薄さに求めることもできる。図1と図2にみる通り中国では「ほっとする人」「心を打ち明けて話せる人」として異性友人を挙げる割合が日本・韓国よりも若干高いようである。この限りでは確かに中国では性別の障壁が低いのだと解釈できる

4) そう思う～そう思わないを各4～1点とすると、男性データの平均は、京都2.35、大阪2.30、大邱2.72、全州2.68、北京学生2.48、北京職業人2.18、河南・山東2.32であった。

5) そう思う～そう思わないを各4～1点とすると、平均は、京都2.29、大阪2.25、大邱1.95、全州2.01、北京学生1.89、北京職業人1.76、河南・山東1.44であった。

6) そう思う～そう思わないを各4～1点とすると、平均は、京都1.33、大阪1.33、大邱1.39、全州1.52、北京学生1.93、北京職業人2.01、河南・山東1.85であった。

7) 男性データで京都15.2%、大阪14.6%、大邱16.2%、全州13.2%、北京学生6.2%、北京職業人11.4%、河南・山東8.6%であり、女性データで京都5.7%、大邱6.4%、全州5.5%、北京学生3.3%、北京職業人5.1%、河南・山東5.6%であった(その他・わからないは除く)。

8) 実際、性役割意識関連の項目と親子関係・友人関係の性差のパターンとは、個人レベルでも顕著な相関を示していなかった。

9) 平均で京都49.9%、大阪48.0%、大邱64.2%、全州56.6%だった。

図1 一緒にいるとほっとする人(質問 a)

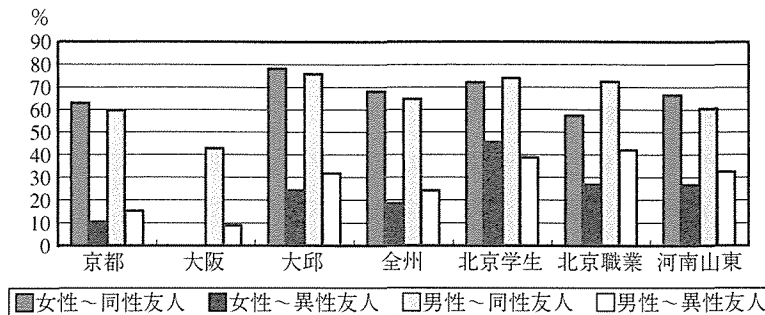
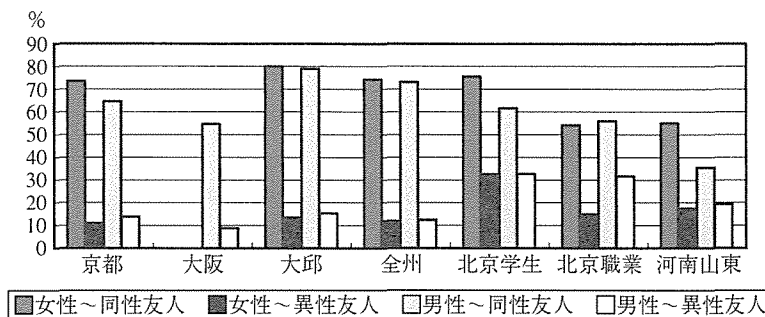


図2 心を打ち明けて話せる人(質問 c)



かもしれない¹⁰⁾。しかし一方で図2では、同性友人を挙げる割合が中国で低くなっており、このことが仮説④の傾向を弱める一つの理由となっている。ちなみに、千石・丁(1992)は中国人の友人関係一般の希薄さについて論じている。ここで用いられたデータでは、同性・異性の区別はないが、主に同性友人が念頭におかれた議論とみてよい。そして、千石・丁(1992)はその原因を政治情勢や家族関係に求めている¹¹⁾。要するに、中国における仮説④の傾向の弱さは、性役割以外の要因でも説明可能だと思われる。

これらの疑問から、仮説の検証結果にみる三カ国の違いが、性別役割分業の「程度の差」を単純に反映しているとは考えにくい。そこで以下では、表1にみる日本の特

10) 異性友人(選択肢6)の選択率は、各国の若者が異性友人と恋人(選択7)との区別をどう考えているかによって左右されよう。この点は今後の検討課題である。

11) 千石・丁(1992)の国際比較分析によれば、中国では、文革や天安門事件といった政治的イベントの影響で、友人を含む他人一般に対する信頼感が低下し、家庭などの身内を重視する傾向が強まったとされる。

徴をさらに詳しく分析し、日本と中国・韓国との性別役割分業の「質の違い」をできるだけ明らかにしてみたい。

3-3. 考察：日本の特徴の背景

日本特有の傾向は、仮説②（子供と同じ性の親の方が子供にとっての準拠的個人になりやすい）が韓国・中国よりもよく当てはまっていることだった。特に「母にほめられるとうれしくなる」「母のようになりたい」とする娘（女性）の割合が、「父にほめられるとうれしくなる」「父のようになりたい」とする娘の割合を上回っていることが、他国ではほとんど見られない特徴である（表1の分析番号11と12を参照）。

図3と図4にみるように、日本（京都）の女性（娘）は、他国と比べて、「母にほめられるとうれしくなる」「母のようになりたい」とする割合が最も高いわけではない。それどころか「母にほめられるとうれしくなる」割合は、三カ国で最も低いぐらいである。一方、「父にほめられるとうれしくなる」「父のようになりたい」とする娘

図3 ほめられるとうれしくなる人（質問 b）

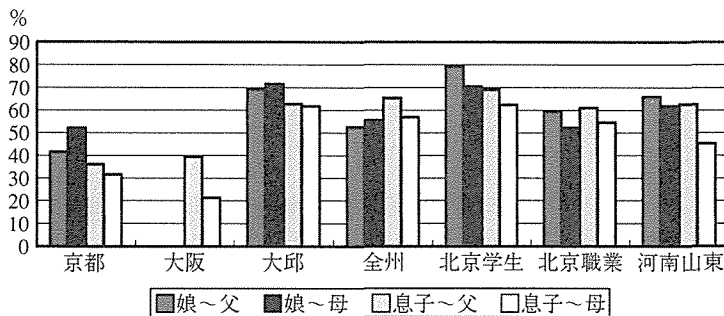
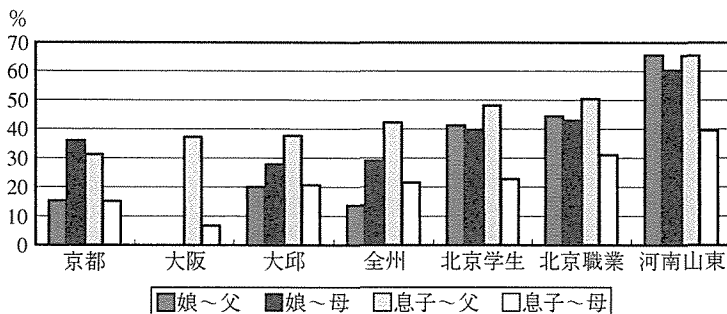


図4 そのような人になりたいと思う人（質問 d）



(女性)の割合は、明らかに三カ国で最も低いレベルにある。他国の女性の場合、「父にほめられるとうれしい」「父のようになりたい」とする割合が「母」に匹敵しており、特に中国の場合などは、若干ではあるが上回っている。すなわち、日本の特徴は、主に「父にほめられるとうれしい」「父のようになりたい」という女性が少ないこと、言い換えれば、他国に比べて父が娘にとっての「準拠的個人」になっていないことから生み出されているのである。逆に言えば、中国・韓国、特に中国では本稿の仮説に反して、父が娘にとっての「準拠的個人」になっており、このことが仮説の当てはまりの悪さの一因となっている。

なぜそうなったのか。説明要因を探索すべく「なりたと思う人」「ほめられるとうれしい人」に対する「父」という回答と、調査票の他のほぼすべての調査項目との相関分析を行ってみた（詳細は省略）が、一貫した説明を可能にするような確たる分析結果は今のところ得られていない。しかしいくつかの分析結果をヒントに、今後の検証課題として次のような仮説を展開してみたい。

日本の女性は「父のようになりたい」「父にほめられるとうれしい」といった意識が弱い。しかし中国・韓国、特に中国の女性は「父のようになりたい」「父にほめられるとうれしい」という意識を「母」と同程度、あるいはそれ以上に持つ。このことは、日本では中国・韓国に比べて父親の「威信・権威」一般が弱いことを意味するのではないか。我々のデータにおいて「父のようになりたい」「父にほめられるとうれしい」という回答と各種の「ナショナリズム意識」が正の相関を示したことは、こうした見方と整合する¹²⁾。従来、父親の威信と国家の威信とはパラレルに考えられてきた¹³⁾。すなわち、父親の威信レベルと国家の威信レベルは正比例するというのである。中国では、父親の威信が（国家の威信と同様に）高く保たれているが故に、性役割の異なる女性でも父親を母親と同程度に準拠的個人とする。一方、日本では父親の威信一般が（国家の威信と同様に）相対的に低いため、性役割が同じである息子（男性）は父をある程度準拠的個人とするが、性役割の異なる娘（女性）は父を準拠的個

12) 最も顕著な相関を示した組み合わせについて数値を挙げる。問19の「自国人であることの誇りを感じるか」で「非常に感じる」～「まったく感じない」を順序変数とすると「父のようになりたい」との間の相関は、スピアマンの順位相関で.268（女性全サンプル）.185（同じく男性）だった。問20の「自国のために役立ちたいか」と「父にほめられるとうれしい」との間の相関は、同様の手法で分析すると、.164（女性全サンプル）.194（同じく男性）だった。いずれも両側1%水準で有意だった。詳細は省略するが、我々の調査データでは「母のようになりたい」「母にほめられるとうれしい」といった回答も「ナショナリズム項目」と相関するが「父」の場合よりも弱い相関にとどまる。

13) 親の権威と政治的権威の関係については Bennis and Slater (1968) を参照。

人とする理由が希薄となる。

以上のように考えると、本稿の仮説は一部修正の必要がある。それは、仮説②「子供と同じ性の親の方が子供にとっての準拠的個人になりやすい」である。この仮説が当てはまるのは、父親の威信が低下し、子供にとって父親が単に「働いてお金を稼ぐ人」と化した場合のみである。この場合、父親は息子にとっての準拠的個人となりえなくても、娘にとっての準拠的個人とはなりにくい。それに対して経済的な役割以外での父親の威信、例えば年長者としての威信であるとか、「イエ」の代表者としての威信などが充分高ければ、娘にとっても父は準拠的個人たりうるのである。日本では父親の威信が低下した結果、たまたま仮説②が当てはまったが、中国では父親の威信が保たれているため、仮説②が当てはまらなかった。韓国もそれに準じた結果だったといえるのではないか。

さて、ここで親子関係の性差に関する日本の特色についてもう一点、論じておきたい。ここまで仮説②の分析11, 12 (表1参照) の解釈を中心に考察してきたが、表1の分析7, 8にみるように、準拠的個人として母を選択する割合が息子よりも娘に多いという傾向も、日本では比較的はっきりしている。また、図3と図4から、日本では、準拠的個人の項目での「娘～母」の選択率が「息子～父」を若干上回っていることがわかる¹⁴⁾。これは仮説で扱えなかった日本の特色といえる。韓国・中国では逆に「息子～父」の選択率の方が高い場合が多く、「娘～母」が上回る場合でもその度合いは日本よりも小さい。以上をまとめて極論すれば、日本では「父不在」かつ「息子不在」、すなわち「男性不在」の親子関係をみることができる。日本では、息子は両親を準拠的個人とせず、父親は娘・息子の双方にとって準拠的個人とはなりにくい傾向がある。その結果、日本では「娘～母」の関係だけが突出してしまうのだ。

こうした状況は、性役割の存在と、職業・産業構造の変動によって生み出されるものと考えられる。つまり、職住分離、自営業の減少、ホワイトカラー化によって、子供は父親の仕事内容をよく理解せずに育つ一方、母親の仕事は子供の生活にとって身近な家事に限定される。こうした場合、パーソンズが言うように「……男児は、女兒が母を見習うのと同じほどには、父を直接的に見習うことはできない(前掲訳書146頁)」。父親を見習うことは息子にすら困難なのだから、娘にとってはさらに至難の業

14) 「ほめられるとうれしくなる人」でみると、「娘の母選択率－息子の父選択率」の値は、京都+16.1%、大邱+8.6%、全州－9.8%、北京学生+1.4%、北京職業－8.9%、河南山東－0.8%である。同じく、「なりたいと思う人」でみると、その差は京都+4.8%、大邱－9.8%、全州－13.1%、北京学生－8.5%、北京職業－7.5%、河南山東－5.2%である。

となる。また、先ほど仮説として述べた日本における父親の威信低下も、こうした職業・産業構造の変動と密接に関係している筈である。残念ながら、我々の調査データでは両親の職業についてごく大まかなことしか分からないため、この点の十分な検証は難しい¹⁵⁾。ただ、父親が自営業に携わる若者が日本よりも韓国にはるかに多いこと(中国ではデータ無し)、父親がホワイトカラー的職種に就いている割合が日本で最も高いことなどは確認することができる¹⁶⁾。

4. 要約と結論

本稿では、パーソンズやアランの所論を手がかりに、親子関係・友人関係の性差に関する4つの基本仮説をたて、その妥当性を日韓中三カ国の若者の間で比較した。基本仮説とは、「仮説①：子供にとって母の方が父よりも親密な存在になりやすい」「仮説②：子供と同じ性の親の方が子供にとっての準拠的個人になりやすい」「仮説③：女性同士の友人関係の方が男性同士の友人関係よりも親密になりやすい」「仮説④：同性同士の友人関係の方が異性同士の友人関係よりも親密になりやすい」の4つである。いずれの仮説も、「男は仕事、女は家庭」といった性別役割分業の強固な社会において予想される親子関係・友人関係のパターンである。分析の結果、三カ国で比較すると日本で当てはまりが比較的よく、仮説④のパーセンテージの差を重視すれば中国で最も当てはまりが悪かったといえる。(以上1節～3-1節)

しかし、こうした特徴は、各国の性別役割分業の「程度の差」を単純に反映したものとは言いがたい。理由の第一に、性役割に関する価値観を分析してみると、日本の若者が他国に比べて特に「保守的」というわけではなかった。第二に、就業構造の実態を考えると、韓国は日本と同程度、あるいはそれ以上に性別分業の構造がはっきりしているが、仮説が最もよく当てはまったのは日本の方である。第三に、日本・韓

15) 日韓のデータでは、両親の従業上の地位(自営、勤め人など)に関する質問項目があるが、中国のデータにはそれが無い。また両親の職種(専門、管理、事務、販売など)に関する質問項目は三カ国に共通してあるものの、自計式の集合調査であるため、判断は対象者にまかされており、他計式の面接調査ほど正確なデータにはなっていない。

16) 父親が自営業・家族従事者である割合は、京都24.2%、大阪23.1%、大邱54.4%、全州63.3%となっている(学生・無職は除く)。また、父親がホワイトカラー的職種である割合は京都76.3%、大阪68.4%、大邱55.4%、全州51.4%、北京学生62.0%、北京職業47.1%、河南山東22.6%であった。しかし個人データレベルで、自営業、ブルーカラー・農業の父親が子供の準拠的個人となりやすいという傾向はみられない。こうした職種の父親は子供にとって身近であっても、収入の不安定性や職業威信の低さから、逆に準拠的個人になりにくい面もあるだろう。我々のデータからは父の職業威信や父の収入(家族収入はあるが)のデータが得られず、この点の詳細な検討は今後の課題とする。

国同様に中国でも父親は母親に比べ、子供にとって親密な存在ではなく、父でなく母を「話せる」とした若者は、むしろ中国農村で最も多かった。第四に、中国における仮説④の傾向の弱さは、同性の友人関係の希薄さからも説明できそうである。(以上3-2節)

そこで、各国の特徴を性別役割分業の「質の違い」から説明することが試みられた。十分な分析結果に基づいているとは言えないが、次のような仮説が提示された。すなわち、性別役割分業の構造は、家族成員における父の威信が高いタイプと低いタイプとに区別することができ、日本は低いタイプ、中国は高いタイプ、韓国はその中間に位置するのではないか¹⁷⁾。そして、父の威信が高いタイプでは、娘にとって父親も母親同様に準拠的個人となりやすく、仮説②「子供と同じ性の親の方が子供にとっての準拠的個人になりやすい」の当てはまりは悪くなる。また、仮説②でみられた日本の傾向をより広く考えると、いわば「男性不在」の親子関係が日本の特徴として浮かび上がる。つまり、息子は両親を準拠的個人とせず、父は娘・息子にとって準拠的個人になりにくい。そしてこのことは、性役割の存在に加えて、職住分離、ホワイトカラー化、家業の減少といった職業・産業構造の変動から生み出されると考えられる。(以上3-3節)

以上をまとめて二点ほど結論を述べる。第一に、日本の若者は観念の上では性別役割分業にかなり批判的だが、半ば無自覚的に形成される親子関係・友人関係の性差の実態をみると、むしろ性別役割分業の構造に深くとらわれていると言わざるを得ない。このことは、分業構造を前提とした諸仮説が、日本で比較的良好に当てはまったことから明らかである。

しかし、この問題に関して、日本の若者が中国・韓国の若者に比べて「後進的」もしくは「保守的」であるとは一概には言えない。本稿仮説②でみられた日韓中の違いは、家族における「父の威信」の高さや職業・産業構造の変動と深く関わりを持つと考えられるからである。これが第二点である。かつて日本でも見られた男子相続の直系家族では、家族における父の威信は現在よりも概して高かったものと推測される。そうした家族では息子も娘も「同様に」、家長としての父親を範とする風があったかもしれない。しかし、核家族の時代となり、父親が純粋に「働いてお金を稼ぐ人」と

17) 瀬地山 (1996: 34頁) にならって、父母 (夫婦) の役割関係と権力・権威関係を分析的に分ければ次のように言えるだろう。親子関係の性差の問題は単に性役割の有無だけでは説明できない。権力・権威の様態によって性役割の内実がどんなものになるかが重要なのではないか。

化すと、経済的な分業の線に沿って、息子はもっぱら父を娘はもっぱら母を準拠的個人とする傾向が強まったのではないだろうか。また、こうした解釈は、職住分離、自営業の減少、ホワイトカラー化が進んだ日本の職業・産業構造とも整合的である。一方、中国のデータでは女性（娘）であっても、わずかな差ではあるが、母親以上に父親を範とする風が共通してみられた。この背景には、女性の就労と男性の家事・育児への参加を奨励する中国の「新たな伝統」の影響もあるかもしれない。しかし、中国でも父親は母親に比べて明らかに「一緒にいるとほっとせず」「話しにくい人」であり、そこに何らかの役割分業の影をみることができよう。そして、そこに父親の威信・権威を強調してきた中国古来の儒教的伝統文化の影をみることの外的外れではなからう。要するに、「核家族」を前提とする枠組み¹⁸⁾に、最も合致するのは日本であり、最も合致しないのが中国だったということではないだろうか。いずれにせよ、こうした解釈の十分な検証は今後の課題として残された。

文 献

- Allan, Graham. 1989. *Friendship : Developing a Sociological Perspective*. Harvester-Wheatsheaf. (仲村祥一・細辻恵子訳. 1993. G・アラン『友情の社会学』世界思想社)
- Bennis, W. G., and P. E. Slater. 1968. *The Temporary Society* (佐藤慶幸訳. 1970. ベニス・スレーター『流動化社会』ダイヤモンド社)
- 徐安蕩. 1996. 「都市家族における社会的ネットワークの現状と変遷」田嶋虹・木下英二訳 (青井和夫編『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会:270-289頁)
- 小林孝之編. 2000. 『変貌する現代韓国社会』世界思想社.
- Merton, Robert. K. 1957. *Social Theory and Social Structure*. The Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳. 1961. R. K. マートン『社会理論と社会構造』みすず書房)
- 落合恵美子. 1997. 『21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・超えかた 新版』有斐閣.
- 尾嶋史章. 1998. 「女性の性役割意識の変動とその要因」尾嶋史章編『ジェンダーと階層意識』(SSM 調査シリーズ14) 1995年 SSM 調査研究会:1-22.
- Parsons, Talcott and Robert F. Bales. 1956. *Family : Socialization and Interaction Process*. Routledge and Kegan Paul. (橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳. 1981. T・パーソンズ, R・F・ベールズ『家族』黎明書房)
- 瀬地山角. 1996. 『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』勁草書房
- 千石保・丁謙. 1992. 『中国人の価値観』サイマル出版会.

18) 『家族』において、パーソンズは純粋な意味での核家族を孤立 (isolation) と双系性 (bilateral) とで特徴づける (訳書26頁)。この限りでは、父親が家長として「絶対的な」権威を持つような家族は想定されていない。ただし、パーソンズが固定的 (かつ肯定的) に描く性役割構造の中では、夫婦間の職業収入の差異が家族内における権力・権威の差異となって現れやすいことも確かであろう。